



● 鉱泉が湧き出る岩窟

伊藤 清一さん

プロフィール

伊藤建築設計事務所を営んでおり、「たまご湯」の建物の移築・改装に携わられる。平成22年より、一関市千厩町第10区自治会会長に就任。



鉱泉が 地域おこしの 起爆剤に。

一関市千厩町第10区自治会
会長・伊藤清一さん他、鉱泉
部「たまご湯」部長・海田茂
さん、同副部長・遠藤孝志さ
ん、同会計・菅原彰さん



● 伊藤清一さん(左から2番目)と一関市千厩町第10区自治会鉱泉部「たまご湯」の皆さん

○たまご湯のルーツについて

先代達からの言い伝えによると、このたまご湯は海田茂さんの曾祖父海田嘉平さんが、明治33年に草地を水田にしようとして開墾したところ、一つの岩窟から水が湧き出るようになった。この水は、以前からたまご水と言われており、飲んだときにゆで卵を食べたようなにおいや味がしたという。水は1分間に15ℓ程湧き出ている。たまたま茨城県からタバコ耕作指導に訪れていた鈴木直治郎さんが、この水を沸かして入浴すれば、万病に効果があると伝えた。そのことを畑の沢地区の人々に教え、その教えにより湯屋組合が設置され5年間程湯屋が営まれた。

○きつかけは、「孫の言葉」から

たまご水を沸かして入浴すると、湯冷めはしないし肌はツルツルになることから、昔からこの地区では、お正月やお盆、土用の丑の日、お祝い事のある日など、1年に1回は入浴していた。孫が小学校に入学する際、たまご水を沸かして入浴したところ、風呂場に温泉のにおいが充満しており、孫が「温泉だ。」とすっかり喜んで入浴していた。その笑顔を見て、「鉱泉が地域興しの起爆剤になるのでは。」と思ったのがきっかけだ。

○活動の内容について

特に、自分達はお金を掛けて宣伝はしていないが、テレビやら新聞など、多くの広報機関の皆さんの方から私達の取材に来てくれる。他地域のイベントに出張して、「たまご湯」を「足湯」として無償で提供したことも広報になった。また、最初はトラックで地元の各家庭の風呂場まで、たまご水の宅配を無償で行った。そのうち口コミで反響が大きくなり、遠くは気仙沼市など他市町村からも問い合わせが多くなった。だんだんと配達に忙

○住民主体の活動

平成12年頃、自治会で会合を開いて、何とか自治会で「たまご湯」を運営しようとしたが、資金の問題があった。秋田、福島、気仙沼等の沸かし湯の温泉の研修にも行った。とにかく資金が無かったから、地元住民がボランティアで、14年頃に荒れた桑畑を整地し、「たまご湯」の建物は譲り受けた物を移築し、15年から16年にかけて完成させた。皆で一致団結して、集会所に加えて、住民同士が裸の付き合いが出来る場所を作りたいという強い思いが原動力となった。平常働いてもらっている人は1日2人の当番制で、老人クラブや60代位の方々に応援してもらっている。最初は二の足を踏む方もいたが、今では、自宅に居るよりもお客さんと触れ合うことで、色々な話題を持ちたり、沢山の方と話をすることでコミュニティも取れるため、「やりがい」や「生きがい」を感じ、皆さん喜んで働いてもらっている。



● 畑の沢鉱泉「たまご湯」

○たまご湯のふれあいについて

開設当初は、利用客は1日に5〜6人しか来なかったが、今では他市町村及び県外からも含め1日30人前後来ている。利用客は主に60代以上となっているが、口コミやマスコミ、インターネットでの

広がりもあってか、県外から若い方も沢山利用しに来ている。1度来た若い方々など、次回以降はお菓子を持参したり、お茶を飲み遊びに来たり、リピーターとして来ている。



● 「たまご湯」祭り

○今までの活動に対する課題と これからの活動における抱負

現在の課題は、建物の老朽化である。特に風呂場の改装を考えており、何とか資金を集めたいと思っているが、補助金や寄付金等を含めた資金の調達に関してはなかなか難しいのが現状だ。

「たまご湯」の運営により、管理に携わっている高齢者の方々は生き生きしており、地元住民も地域に誇りを持つようになった。これからの維持・管理については、今までみんなで頑張ってきたこの「たまご湯」を、地元の子供達にも積極的に関わってもらいながら、この先もすたれることなく更なる発展を目指し、自治会員みんなで一致団結して頑張っていく。

● 畑の沢鉱泉「たまご湯」

〒029-0802
岩手県一関市千厩町小梨字小林334-1
連絡先・電話019-1153-2618